

荒野の果てに見た美しきコロナとプロミネンス 2023 年 4 月 20 日（木）金環皆既日食

小山田博之

○はじめに

2019 年 10 月 12 日（土）の夕方、台風 19 号「令和元年東日本台風」が襲来する中、多量の荷物が届いた。消費税の税率が 10%になる直前に注文した惑星観測用の C11 一式と海外移動観測用の AP フォトガイダー一式である。2017 年 8 月の北米皆既日食後に買おう買おうと思っていた新しいポタ赤がやっと届いたが、よりによって大型台風襲来時である。狭い玄関が段ボールで塞がれてしまい、数日かけて開封していった。これで来年 6 月 22 日（日）の台湾金環日食の機材の準備が整ったと思った…。

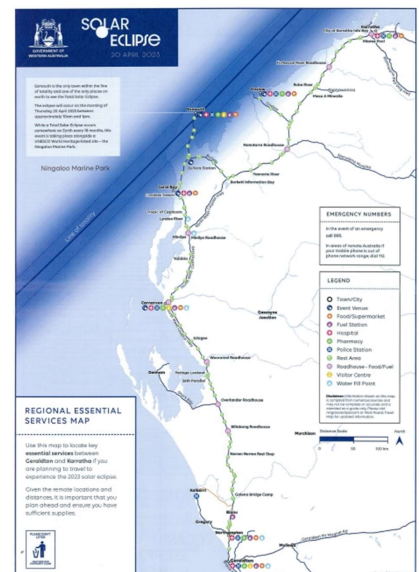
2022 年 11 月、新型コロナウイルスの広がりで始まった在宅勤務も 2 年半以上経過していた。自分のペースで作業ができるという在宅勤務のメリットもあるが、休暇中でも作業の進捗が気になって会社の PC に接続して結局作業を行ったり、スマートフォンに連絡が入り、その対応を行ったりするなど、仕事と休暇のメリハリが無くなるなどのデメリットもあった。仕事と休暇のメリハリをつけるには国外に移動して、ゆっくり休みたいと考えていた矢先、日食仲間の Y さんから、翌 23 年 4 月にオーストラリアで見られる皆既日食ツアーの案内をメールで頂いた。お金以前に休暇の取得だ！と思いダメ元で課長に相談したところ、繁忙期明けなので大丈夫と OK を頂いた。定員が 15 名であるため、後で後でと思っているとアッという間に埋まってしまう可能性もあったので、速攻で申し込みを行った。

○端っこギリギリ

今回の皆既日食を起こしているサロスを知ったのは、1987 年 3 月 29 日のガボンで撮影された全周ベイヤリービーズの写真である。その 18 年後の 2005 年 4 月 9 日は、多くのツアーが金環部分のコスタリカやパナマ方面に出かけているが、雲が多く明暗を分けている。

今回は、全体では金環皆既日食であるが、ほとんどは皆既日食が占めている。その皆既日食帯が通る陸地はオーストラリアや東チモール、ニューギニア島で、オーストラリアに至っては北西の端がわずかにかかる程度であった。この付近に大きな都市は無いが、他の 2 ヶ所に比べれば、晴天率が良く、治安も良い。このような理由からツアーのほとんどがオーストラリア方面だった。

この年は年度末が早く来たような状態で、12 月後半から納品ラッシュが始まり、3 月中頃まで続いた。そのような中、紙ベースでワクチン接種証明書を取ったのちに、「Visit Japan Web」アプ



リをスマートフォンにアップロードしたうえで、利用者情報や旅行のスケジュール登録等のデータ登録作業を行った。また英語への入力や顔認証に四苦八苦しながらも eTA (AustralianETA、電子渡航許可) への登録をスマートフォンで行ったりして、本番に備えた。

4 月に入って仕事がやっと落ち着いた。海外遠征のために購入したものの、国内の移動撮影でしか使用できなかった AP フォトガイダーを一旦組み立てて、動作チェックを行った。すると、コントロールパネルが表示されない不具合を発見、マニュアルを見ながら復旧させた。ついでに、設定を南半球使用に変更した。出発数日前には、AP フォトガイダーと望遠鏡を本番と同じように組み立てて、動作チェック、分解してスーツケースに収納した。出発前日の 15 日 (土) には、衣類もスーツケースに積み込んでいった。

一眼レフカメラについては、稼働している 3 台持参することにした。EOSRa は直焦点撮影、EOS90D は、魚眼レンズによる本影錐撮影のほか、本格スナップ写真用。EOS60Da は星野撮影用にした。これ以外にスナップ撮影用にコンパクトタイプを 2 台持参することにした。この中で Ra と 90D については、1 秒ごと 3 段階のオートブランケット撮影が RAW 画像保存で数分間可能かどうか、実際に動作チェックを行った。

○フィリピン_タール火山

成田空港の集合時間は 9 時 10 分だったため、自宅を 5 時 10 分過ぎに出発して移動を開始した。

もちろん、出発前に相方をお願いして現金やカード、パスポートの確認を何度もした上である。新宿発の成田エクスプレス出発が 6 時 51 分と早朝のため、駅中の売店が開いているか不安だった。そのため、朝食は最寄りの駅へ行く途中のコンビニで調達した。その甲斐あって、8 時 10 分過ぎには成田空港へ無事に到着した。両替や空港内の探検をしつつの移動だったために、集合場所のカウンターには 8 時 30 分頃に到着した。添乗員の M さんは到着しており、顔見知りも何人か到着していた。各自、やり方を教えてもらいながら自動チェックイン及び、機内預けの荷物の手続きを行った。

(私が乗ったシンガポール航空、無料で預けられる機内預け荷物の重量制限、往路は 30kg までですが、復路は 25kg まででした。ちなみに手荷物は 7kg まででしたが、実際は手荷物の重量が計測されることはありませんでした。)

久しぶりの出国の手続きを行い、搭乗口までの道中にある免税品店を眺めていった。圧倒的に多いのが化粧品関係であったが、トトロなどスタジオジブリのグッズがあったのは正直驚いた。無論、今購入しても無駄なので、眺めるだけに留めた。10 時 40 分に搭乗が開始され、11 時 10 分頃予定通り離陸して、シンガポールへの約 7 時間のフライトが始まった。



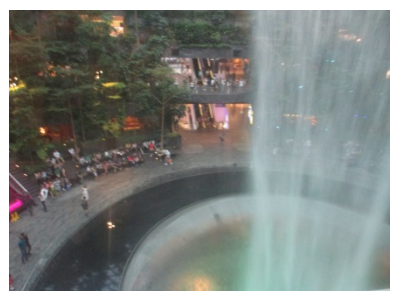
飛行機では映画などが流されていたが、私はいつもの通りフライト情報が表示されるモニターに切り替えて、時折雲や陸地を撮影することにした。私の座席は通路側だったので、外をずっと眺められる位置ではなかったが、好きな時に動き回れる方のメリットが大きかった。

成田を出発して約3時間。乱気流のために遅くなった機内食を済ませて、沖縄を通過するころから、フィリピン上空の飛行ルートが気になり始めた。沖縄を過ぎた時点での予定では、マニラの北方を通過するルートになっており、このルートだったら1991年6月15日に20世紀最大の噴火を起こしたピナツボ火山付近が見られる。大学時代、火山を研究していた身にとっては大いに期待したが、期待むなしく予定ルートがどんどん南下していった。しまいにはマニラより南方を通過するルートに変わってしまった。それでも予定ルートを拡大するとタール火山がその中に含まれていた。タール火山上空に差し掛かるころから、CAさんたちがいる窓際に陣取って撮影を開始した。この火山は湖（タール湖）の中の火山島であり、普段はストロンボリ式の穏やかな噴火であるが、1965年には火山島の西岸で発生したマグマ水蒸気噴火が起こり、ベース・サージ（火砕流の一種で、火山ガスを主体とする希薄な流れ）が世界で初めて記録された著名な火山である。しばらくすると湖面と植生の無い火口がある島が見えてきた。これだ！と思い、夢中でシャッターを切った。

その後は、座席に戻ってゆっくりくつろいだ。シンガポール_チャンギ国際空港到着時は、到着便が混んでいるため、上空で待たされたが、17時40分（以下、現地時間とする（UT+8時間、西部オーストラリアも同様））によりやく着陸した。

成田とは異なり、蒸し暑いシンガポール空港内（Terminal 3）、乗り換え便の搭乗口を確認しようとしたが、まだ案内は表示されていなかった。パース行きの飛行機は、日付が変わった後の24時過ぎの出発だったために、集合場所・時間（22時10分）を確認して一旦解散した。乗り換えで7時間も待たされるのは、5時間近く待った99年皆既日食以来のパリ以来であった。仕方なく、Tさん、Wさん、Kさん、Yさんの仲間と空港内（成田空港よりずっと広大）をぶらついたり、Mさん達と一緒に食事を取ったりして時間をつぶすことにした。

（本来はキャノピーパークへ行って、4つの自然&エンターテインメントエリア（ディスカバリースライド、フォギーボウル、ペタルガーデン、トピアリーウォーク）を楽しみたかったが、一旦出国しないと入場できないことがさんざん歩き回った挙句判明しま



した。目的はあくまでも皆既日食のため、残念ながら諦めざるを得ませんでした。)

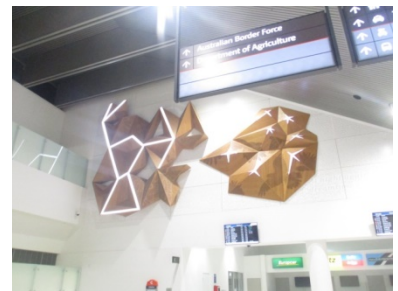
空港から出ていないのに、なぜか搭乗口の手前で再度 X 線検査を受けるなど少々戸惑ったが、オーストラリア入国カード兼税関・検疫申請書(英語)を受取って、日付が変わった 23 時 30 分頃から搭乗が開始され、予定より 30 分程度遅れた 17 日(月)の 24 時 30 分頃パースに向けて離陸した。

(乗り換えなのになぜか再度 X 線検査、アムステルダム空港でも経験しました。あれは正直戸惑います!)

今度は成田ーシンガポール間の 7 時間のフライトとは異なり、約 5 時間である。それほど長距離ではないため、気持ちは楽だった。インドネシアのパレンバンの方を飛行していた 1 時 10 分頃に機内食が出された。旅行会社から頂いた見本を参考にオーストラリア入国カード兼税関・検疫申請書を記載したのちは、ウトウトしてきたために休むことにしたが、今回も通路側だったために、他の人がぶつかるたびに起こされてしまう状態が続いた。



飛行機は 5 時ごろ無事にパースに到着したが、途中で飛行機が停まってしまった。どうやら、予定よりも早く着きすぎたために、滑走路で待機するとのことだった。俺たちは待て!をされている犬ではないと思ったが、焦っても無意味である。5 時 20 分頃、ようやく飛行機から降りることが出来た。検疫や入国審査(わざわざ入国のスタンプを押して頂きました)、機内預け荷物を受け取って、パースから合流する K さんと現地ドライバー兼ガイドのジョンさんと合流できたのは、6 時 30 分頃であった。ジョンさんがいた到着ロビーにはオリオン座やすばるのオブジェが飾ってあったが、北半球仕様での見え方であったのが不思議であった。



(ジョンさんは、タスマニア生まれパース育ちで来日経験があり、英会話教室の NOBA で教鞭をとったことあるとのことでした。もちろん、日本語は堪能でした。超長距離ドライブや詳細な案内など、今回のツアーでは大変お世話になりました。)

○リップルとエビ

ジョンさんに案内されて、スーツケースを転がしながら空港を出て駐車場へ移動した。外はシンガポールと異なり涼しく気持ち良かった。空は晴れ間があったが、秋の空のような雲が浮かんでいた(当たり前ですが)。その中に日食 3 日前の月が見えており、必死になって探しては撮影した。



空港を出たバスは、パース市内の TDL の 7 倍の広さがある植物園「Kings Park and Botanic Garden(パース市街地を横切るスワン川に面した公園)」へ向かった。公園内に設置されているカフェで朝食をとるためである。空港から 30 分程度で移動できたが、眺めは非常に素晴らしかった。街づくりが今も進んでいるパースの市街地を一望することが出来

た。

何とか（慣れない英語で）オーダーして、朝食をとったのち、8時40分の集合時間まで時間があつたので、その辺を散策することにした。すると、望遠鏡を出して太陽を見せている方がいた。よく見ると、太陽望遠鏡であつたので、私も覗かせてもらった。所々にプロミネンスが見えており、太陽黒点も一つだけあつた。黒点の数は少ないものの、数日後の皆既日食を迎えるには期待を持たせるプロミネンスの見え方だった。どうやら、NASAの方々であり彼らもエクスマウスに移動して、皆既日食を見ろとのことであつた。日食グラス（NASAのロゴ入り）がおいてあり、いただいても良いか確認したところ、OKと言われたので丁寧にお礼を言っていた。今回は眼視用の日食グラスを持参していなかったので、丁度良かった。



ここで一旦パースの市街地に別れを告げて、一路エクスマウスへ向けて北上を開始した。本日は、ピナクルズ経由でジェラルトンまでの約400kmの移動である。それでも片道約1,300kmの3分の1の工程である。通勤電車が中央を走っている（駅舎のデザインも各駅で異なっている）幹線を通ってパースの市街地を抜けると、それまでの街並みに代わって草地や小麦畑、牧草地が広がってくるようになった。



人生で初めて見るインド洋に面した海岸線に近づくにつれて白い砂の山が見えるようになった。ジョンさんによると、これは海岸の砂（白砂）が風で運ばれて堆積したものということである。夢中になって撮影していると、これよりもっと見事な砂山があるから焦らないで下さいとジョンさんから言われた。確かに、最初にみたものより立派な白砂の山が見られるようになった。そして、この白砂は日本にも運ばれており、和歌山の白浜がここの砂で形成されていると話されていた。

（そのことは、以前NHKのブラタモリを見ていて知っていました。）

11時前にピナクルズに到着した。パースの市街地とは異なり、日差しがだいぶきつくなっていた。トイレに入ったのちに、ジョンさんの案内でピナクルズの散策が始まった。ジョンさんによると、当該地は大昔はユーカリの森林になっており、その根茎部分に石灰成分が溜まった。そのうちに温暖化などで樹木が無くなった結果、地表が浸食されて、今のような柱のような奇岩が露出するようになったということで、奇岩の中には根茎の構造がそのまま残っているものもあった。それから次第に奥に入っていくが、似たような景色が広がっているために、決して隊列から外れないでくださいと注意された（実際に遭難して、探し出すのに数時間かかったケースがあったとのこと）。奇岩以外は砂地になっており、様々なリップル構造やクロスラミナが見られた。大学時代に購読した Basics of Physical Stratigraphy and Sedimentology（層序学と



堆積学の基礎)を思い出して、スケール(人間含む)を入れたうえで何枚か撮影した。砂地には、カンガルーの足跡もあり、その跳躍力に驚いた。これもスケールを置いて撮影した。またそれぞれトトロ、象、カオナシと言われている石柱も撮影した。

12時40分頃ピナクルズを出発した後は、15km程度北方にある Lobster Shack Cervantes WA に移動して昼食をとった。ジョンさんによると毎日大量のイセエビが水揚げされており、周辺はエビの街と言っていた。ロブスタービールと共に食べたイセエビは大変美味しかった!

食後の14時10分過ぎ、昼食場所にほど近い Lake Thetis (テティス湖)に移動して、ストロマトライトを見に行くことにした。ストロマトライトは、当初日食翌日の21日(金)に世界的に有名なハメルンプールで見ることになっていたが、昨年襲来したサイクロンのために栈橋が破壊されて、見学が不可能であるために、急遽この地で見学することになった。ジョンさんによると、この湖は地下で海とつながっているのとことである。栈橋から湖底をよく見ると小さな泡(酸素)が出ており、これらのバクテリアが地球を酸素の星に変えたと思うと、とてつもない時間が必要と改めて感じた。

それから一路、今夜のジェラルトンまで移動を続けた。その間は、広大な大地が広がっており、大昔アニメで見た風車や、強風のために横に伸びる樹木などが見られた。途中から単線の線路が道路に並行するように走っていたが、パース市街地で見た路線と異なり、駅や架線は無く、貨物用か?と思った。

17時ごろ、丘を越えるとこれまでにない街並みが広がっていた。今夜の宿泊先であるジェラルトンである。さすがに、それまでスイスイと走っていた(時速100km前後)バスも次第に速度が低下していった。パースの市街地以来の久しぶりの信号で、停車することもあった。

(我々の乗っていたバスはリミッターが付いており、時速100km以上出せないとのことでした。ただ下り坂では、これよりも若干速度が出るとのことでした。)

ホテルに向かう前に Northgate Shopping Centre で食料を調達することになった。リンゴやパン、カップラーメンを購入したが、それ以外に巨大なマッシュルームにも驚いた。カップラーメンのコーナーには、なぜか出前一丁が売っていた。夕食はホテルに隣接したレストランに行くという話もあったが、念のためにそれぞれ2食分を購入した。こうして18時ごろ、宿泊先のホテル Nesuto Geraldton Apartment Hotel (ネスト ジェラルトン アpartment ホテル) に到着した。



当ホテルは、部屋にはキッチンが付いており、2人分のスースケースを広げてもスペースがあるなど、部屋の広さは充分だった。早速無精ひげを剃って、同室になったYさんと共に、とにかく休むことにした。しばらくすると添乗員のMさんから連絡があり、隣接しているレストランは閉店しているが、徒歩で20分ほどにレストランがあるので、そこに行かないかとお誘いがあった。しかしながら、体力を使い切ってしまった身にとっては、20分の徒歩はしんどい。丁寧に断って、Yさん共々先ほど購入した食料（パン、カップラーメン及びリンゴ）を食べることになった。しばし食休みをしたのち、早々と就寝した。

（添乗員のMさんによると、パースを除いて今夜の宿はエクスマウスの道中で一番まともな？ホテルとのことです。それを聞いて、明日以降の宿はどうなっているのか？と正直思いました。）



○雄大な地球史

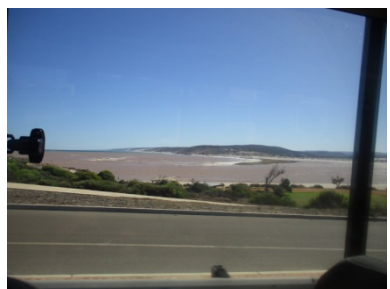
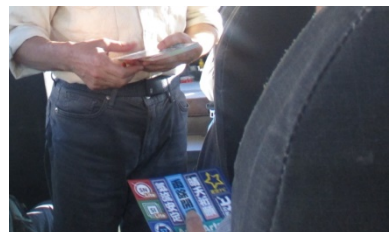
ツアー3日目の18日（火）、集合時間は7時30分、出発は45分ということで、6時30分頃起床した。一晩ぐっすり寝たために、疲れはほとんど無い。晩御飯と同じメニューの朝食を7時ごろにとって、急いで身支度を整えた。日差しも強くなってきたために、半袖にした。

この日は、カルバリー国立公園経由でカーナボンまでの約600kmの移動である。往路では一番の移動距離である。市街地を抜けると、荒野や小麦畑、牧草地が広がってくるようになった。また、開拓の過程で発生した土砂を積み上げた山が道路沿いにみられるようになった。

途中、ジェラルトンの北部にある（とはいっても、ジェラルトンのホテルから直線距離で約45km）Northampton（ノーサンプトン）のスーパーに立ち寄った。何かと思うと、ジョンさんが昨日スーパーで我々の分を含めたペットボトルの水を買い忘れたため、ここで購入するということである。その停車している間、アストロアーツのKさん（その手の業界では曇り男として有名!?!）からステッカーを数枚頂いた。

再び走り出したバスは、流刑地時代に使用された収容所の脇を通り過ぎて、バクテリアのためにピンク色になっているHutt Lagoon（ハットラグーン）に向かった。その前にインド洋に面した一旦Public Toiletでトイレ休憩を行って、湖まで戻った。

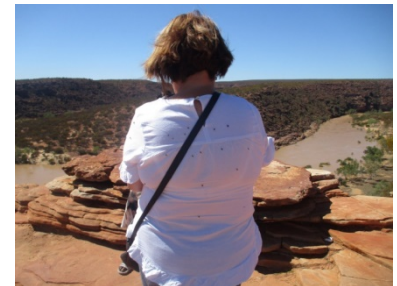
9時10分頃から10分程度、湖の周辺を散策したのちは、カルバリー国立公園の手前にあるカルバリーの市街地に移動して、交番脇のショップで昼食を購入した。カルバリーの北側はマーチソン川があったが、先週北部オーストラリアに上陸したサイクロンのためか



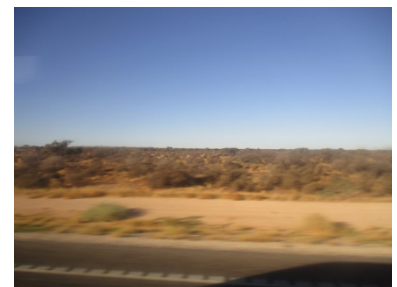
濁っていた。ジョンさんによると、これほど濁ったマーチソン川を見るのは初めてということだった。

（今回の旅では、オーストラリアを含め外国ではカード社会であることを改めて認識しました。とはいっても、暗証番号まで入力することはほとんどありませんでした。しかし、ここのショップでは暗証番号と共に液晶にサインしてほしいと言われました。もちろん、ジョンさんに間に入っていていただいて購入を済ませました。）

10時40分頃、カルバリー国立公園のゲート（有人、右ハンドルの国なのに左側に受付があるため、ジョンさんがイチイチ降りて料金を支払っていました）を通過して、終点に到着したのは11時だった。それからは展望回廊などに移動して、4億年前から少しずつ堆積した峡谷の絶景を見る事ができた。確かに、西オーストラリアのグランドキャニオンと言われているのも納得した。強い日差しの下での散策が終わった後は、東屋で先ほど購入した昼食をとった。しかし、ありがたくないものが多数群がってきた。ハエである。ジョンさんによると、乾燥地帯あるため、人間の汗の水分を求めてくるというのであるが、尋常ではない程の群がり方であった。そんなハエを追っ払いながらの昼食であった。ジョンさんによると、オーストラリアでは、人口よりハエの数が多いということである。



12時40分頃、カルバリー国立公園を出発した。後は、ひたすら今夜の宿泊先であるカーナボンへの移動である。もちろん、トイレ休憩をとりながらである。ここまできると、道路の両側は耕作地や牧場は無くなり、低木や草地が広がる荒野が延々と広がるようになった。



17時40分頃、道路の右側にロケットやアンテナが見えてきた。後で調べたら、Carnarvon Space and Technology Museum（宇宙博物館）であった。宿泊先の Gateway Motel Carnarvon（ゲートウェイ・モーター・カーナボン）に到着したのは、その直後であった。

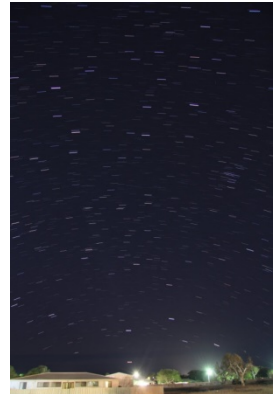
今夜の宿は、管理棟（レストラン）を中心に宿泊棟がそれぞれ離れたモーターで、昨日と異なり3人一部屋（KさんとYさん、そして私）であった。さらにジェラルトンのホテルよりも狭いために、3人がスーツケースを広げたら、足の踏み場もないほどだった。ベッドはツインサイズのもの2段ベッドがあった。私が2段ベッドの上段で寝ることになった（云十年ぶり！）。夕食開始は19時だったために、落ち着く間もなく、夕食会場へ移動した。本日の夕食はバイキング形式だったが、なぜか野菜はほとんど無かった。それでも、オーストラリアに来てはじめてのまともな夕食だったので、なんとか狭い通路を通して、ミートソースを中心に何度もお替りしたのは言うまでも無かった。

1時間程度で夕食を済ませて、部屋に戻ろうとしたところ、添乗員のMさんやTさん、アストロアーツのKたちが日食の観測場所について、いろいろ協議していた。エクリプスナビゲータで

計算すると、中心線より南側で月縁の関係で継続時間が長くなることがわかった。また第二接触より第三接触時に派手なベイリービーズが見られることがわかった。そこで、そのあたりの広場（トイレ有）を探してみるようなことを話されていた。その近くの壁にはコピー用紙であったが、今回の日食の案内があった。今回の日食で初めて見た日食の案内（ポスター）であった。しばらく話を聞いてから、部屋に戻って星野撮影の準備を開始した。

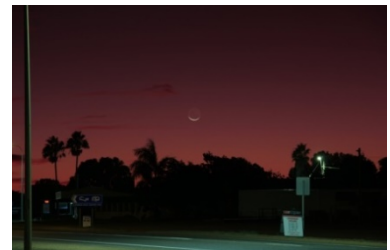


ホテル周辺を含めカーナボンはジェラルトンに比べれば田舎であるが、道路沿いには街灯があり、先の宇宙博物館方面には強い照明があるなど、思ったよりも都会！？だと思った。それでも照明が直接当たらないような場所を選べば、ここ多摩よりはずっと良く星空が見える。天の川も確認することが出来た。赤道儀を設置するような星空ではなかったので、ホテルの前の道路の南側に移動して、固定撮影で南十字とニセ十字周辺を撮影した。その後は、宿泊棟を一回りして、照明が届かない場所を探した。すると北側の道路を隔てたところに街灯が届かないところがあった。早速そこに移動して目を凝らすと、北中する逆さ獅子座が見えていた。面白いと思って、撮影を行った。あとから K さんも合流して一緒に撮影した。22 時頃まで撮影していたが、いい加減疲れたので、ホテル部屋に戻った。部屋に戻ると、Y さんがすでに休んでおられた。



○静かな海岸とお祭り騒ぎ

19 日（水）、朝食は夕食と同じ場所で 6 時からであった。あまりにも遅いくと、料理が残っていないと考え（実際、昨晚はそうでした）、早め早めに行くことにした。しかし、外に出ると日本では見られないような赤い朝焼けの空に日食前日の細い月が見えていた。急いで部屋に戻ってカメラと三脚を取り出し、数枚撮影した。それから改めて朝食会場に行った。



今日の宿泊先はキャンプ場でカメラのバッテリーの充電はできない。このため、本日は日食本番に備えて、容量が小さいスナップ撮影用のデジカメのバッテリーは、使用を控えて可能な限り温存することとした。あと多少の放電もばかにならないと考え、出発直前まで充電を行った。



この日は 7 時 30 分に出発して、300km 離れた皆既日食帯へ移動した。カーボン近くの道路沿いはバナナ等の農園があったが、ほどなく茶色の蟻塚いくつも点在する荒野に変わった。出発して 1 時間 50 分ほどするとエクスマウスへ分岐点に到達して、引き続き移動を続けた。その甲斐あって、10 時 20 分頃今夜の宿泊場所のオートキャンプ場があるコーラル・ベイに到着した。そこで給油（この時期、



日食帯周辺のどこのスタンドでも 10L までの制限) をしてからキャンプ場入口のオフィスに移動した。トイレ休憩と日食に伴う通行規制の情報収集のためであったが、交通規制に関する情報は無かったようだった。出発が 10 時 50 分と言われたので、多少時間ができた。このキャンプ場の敷地内にショップがあることはグーグルで知っていたので、日食グッズがあるのではないかと、急ぎ足でショップに向かった。しかし、ダイビングなどの用品ばかりで、お目当てのグッズは見当たらなかった。数軒目に入ったところで、太陽がデザインされた用品を見つけた。Tシャツではないが、タオルである。よく見るとカップや日食グラスもあった。カップは帰り道に損傷する可能性もあったので、タオルと日食グラスを購入、多少迷いかけたが、リミットギリギリでバスに戻る事ができた。



一旦キャンプ場を離れて、昨晚候補に挙げた海岸に移動することにした。コーラル・ベイから幹線に合流した直後で検問？があったが、ジョンさんが説明したところ、普通に通して頂いた。

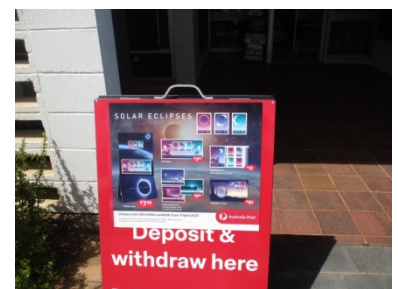
(キャンプ場を出発した直後、道路脇に「Exmouth」と書いた段ボールを掲げている現地の青年が立っていました。みんなエクスマウスに入りたいんだ…と思いました。)

幹線からの分岐点がわかりにくく迷いかけたが、12 時 10 分頃目的地である Learmonth Jetty (ラーモンズ栈橋) に到着した。数台の車と人目を気にすることなく抱き合っているカップルがいたが、広さは充分で見晴らしは申し分なく、トイレもある。



(この近くには空港 (Learmonth Airport) もありましたが、パースからの飛行機代は 20 万円！ということでした)

ただ明日の朝、我々が到着した時点で先客が大勢いたら、機材をセッティングできる用地が無くなっている可能性もある。ましてや、このような穴場的な場所の情報は SNS で拡散される可能性がある。そのため、昼食及び明日の朝食の調達も兼ねて、別な候補地を探すために、エクスマウス方面へ再度移動を開始した。この時点では、エクスマウスまで移動するつもりはないと添乗員の M さんから言われた。されど、走っても走っても適切な候補地は見つかなかった。昼食を調達できそうなスーパーなども無かった。そうこうしているうちに、エクスマウスの街並みに入ってしまった。さすがにここは、どこの駐車場も車が一杯で、日食のお祭り騒ぎ状態を感じた。13 時頃、スーパーがある近くの路肩にバスを止めて昼食や日食当日の食料の調達を行った。私は、昼食以外に、このにぎやかな状況であれば日食 Tシャツなどの日食グッズが手に入るのではないと思った。お店の中には、「明日は日食のために営業しません」という看板が掲げられていた。ふと顔を上げると、一角に人だかりができていた。よく見ると、日食 Tシャツやキャップが売られていた。Tシャツは迷わず購入したが、価格は 50 オーストラリアドルであった (約 5,000



円！）！キャップも購入しようと思ったが、金額が金額で柄も良く分らなかったのが、こちらは購入を諦めた。

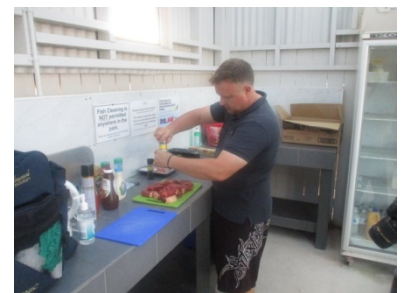
（駐車したところから少し離れていたところに郵便局がありました。記念切手があるのではないかなと思って行ったのですが、時間が無かったため写真を撮影するのが精一杯でした。）

13 時 30 分、エクスマウスを出発。観測候補地を探しながら、宿泊するキャンプ場へ移動を開始した。しかしながら、適当な場所は見つからず、通行規制に関する情報は手に入らない。今朝キャンプ場を出発したときも途中で警察がいた以外、規制している様子は見られなかったのも、特に問題は無いのではないかなということになった。バスの中で昼食をとって、16 時少し前にキャンプ場に戻ることができた。

キャンプ場に到着して、落ち着く間もなくテントの設営である。想像していたより簡単に？設営できたが、細部のセッティングは手こずった。それでも 17 時過ぎに何とか二人用六張り分、三人用一張り分の設営が完了した。これらのテントは、本来はもっと収容人数があるが、さすがに余裕のある収容になっていた。その傍らでジョンさんはキャンプ場のキッチンでバーベキューのお肉（ステーキ用）等の仕込みを行っていた。我々とはいうと、添乗員の M さんから寝るときに使用するマットやオプションで申し込んだシュラフを受取った。



18 時ごろには流れで夕食が始まった。ビールを飲みながら、ジョンさんが焼き上げたお肉やソーセージを頂いた。空は次第に暗くなって、金星が輝き始め、ケンタウルス座の α 、 β 等が見え始めた。ただしオートキャンプ場であるため、我々が食事をした場所を含め、照明が半端ではない。星空案内はできるものの、撮影は残念ながら諦めざるを得なかった。その分、星空を気にすることなく寝ることができると思った。



（実はキッチンに冷蔵庫のためのコンセントがありましたが、バッテリーの充電ができないように、しっかりとカバーで覆われていました！）

そうこうしているうちに明日の起床、出発時間に関して決める時が来た。テントの撤去には照明がいるが、すっかり明るくなってから撤去・出発では、昨日下見した海岸の最適地を抑えられてしまう可能性もある。幸か不幸か照明もあるし、ヘッドライトも各自装備していた。そのため、5 時 30 分から撤収を開始、6 時 30 分に出発することにした。

（この後、我々（ジョンさん）が使用していたキャンプ場備え付けのコンロを現地の別グループが使用していました。しまいには点火の仕方を教えてほしいとお願いされました。食事の時間帯が早すぎのではないかなと思ったのですが、結果は丁度良かったです。）

はじめはシュラフを枕にして寝ていたが、夜が更けるにつれて、さすがに冷え込んできた。シュラフを広げて改めて寝直した。

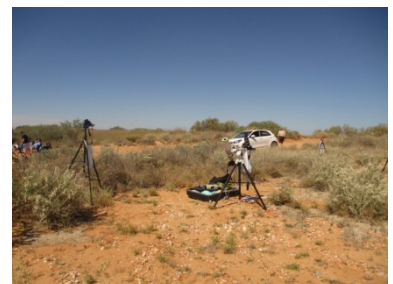


○待ちに待ったこの時

いよいよ日食当日。5 時ごろに起きてしまった。テントから外を見ると、所々雲があるものの晴れ間のある天気だった。昨日夕食を取ったところを見ると、やはりこうこうと照明がついていた。よく見るとアストロアーツの K さんや F さん、T さんたちが夕食を取ったテーブルで朝食をとっていた。当初バスの中で朝食を取ろうと思ったが、何も狭いバスで取る必要はないと考え、早速食べることにした。そうこうしているうちに同じテントだった Y さんを始め、他のテントからも起きだす人が出てきて、それぞれでテントの撤収を行った。その甲斐あって、6 時前にはほとんど全てのテントの撤収が完了した。ジョンさんは敷地内のホテルに宿泊していたが、この頃には合流して、残ったテントの最終的な撤収を行った。そして、予定通り 6 時 30 分頃、キャンプ場を後にした。

移動を開始して間もなく日の出を迎えた。雲が多い天気では心配していたが、エクスマウス方面に向かうにつれて、雲が次第に南の方に遠ざかっていくのがわかった。渋滞もなく、8 時前に昨目下見した Learmonth Jetty（ラーモンス桟橋）に到着した。心配していた先客はほとんどいなく、これだったら思い通りの場所でお店を開くことができると思った。ただ、風がちょっと強いのが気になった。

早速機材をどこにセッティングするか考えることにした。桟橋部分はコンクリートでできており見晴らしも良い。当初はここにしようと思ったが、強風で潮風を浴びたら、機材がダメになってしまう。そうでなくても、高波が来たら、一発でアウトである。海岸線からある程度離れた場所の下草がほとんどなく、地盤がある程度硬い箇所を探すことにした。ふと I さんがセッティングされているところより後方、トイレより手前の地点に、地面がある程度固い場所を発見。ここに機材をセットすることにした。T さんも私の斜め後ろでセッティングを開始していた。強い日差しの下で多少参ったが、9 時過ぎには大よそのセッティングを完了した。



なお、当該地で見られる日食の諸元は以下の通りである。

Start of partial eclipse (C1)	: 10:04:11.0
Start of total eclipse (C2)	: 11:29:21.6
Maximum eclipse (MAX)	: 11:29:49.1 (継続時間 55 秒)
End of total eclipse (C3)	: 11:30:16.6
End of partial eclipse (C4)	: 13:01:58.7

機材のセッティングを完了した後は、ツアーのメンバーの方の機材を見ては撮影した。一方、ジョンさんは潮風が機材に当たらないようにバスの向きを変えていた。すると、K さん、W さん、Y さん達は、そのバスの反対側で機材をセッティングされていた。一方、観望専門の M さんや I さんは双眼鏡だけ



のセットであった。

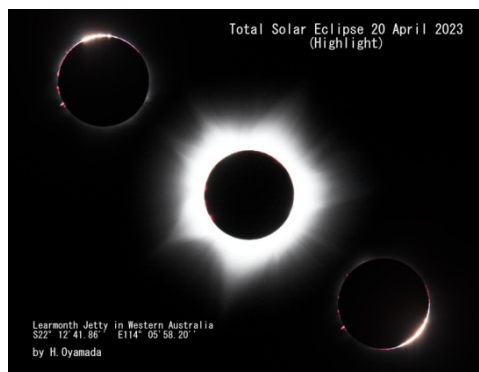
海岸沿いには我々のツアー以外に現地の方々も車で次々と乗りつけてきて、カメラをセットしている方もいたが、望遠鏡をセットしているのは我々だけであった。他のツアーを始め、思っていたよりも人がいなく、エクスマウスの街並みのような賑わいがなかったために、ここは本当に皆既日食帯に入っているのかと思うほどだった（笑）。現地の方は、ビーチのついでに日食を見に来たのか？日食のついでにビーチにきているのか？分からなかった。

10時過ぎ、いよいよ太陽が欠け始めた。伊豆や房総半島では、この程度のかげ方で今回の日食が終わってしまうのかと思って、欠けた太陽を日食グラスで眺めた。撮影の方は、黒点が明瞭に写る露出に設定して10分ごとの撮影を行った。一旦欠け始めた太陽は、ゆっくりと着実に欠けていき、先ほど見えていた黒点も食されていった。いつの間にか、強い風も収まっていた。

11時、皆既まで約30分に迫った。低木しかないため、木漏れ日は無いと思っていたが、それでも諦められずに周囲を探してみたところ、下が砂地で明瞭ではないものの、欠けた太陽が写されていたので夢中になって撮影した。次第に日差しも和らいで、来たときの気温は40℃以上あったが30℃程度まで下がっていた（Tさん談）。この時間になっても、乗りつけてくる現地の方がいて、私としては完全に遅刻だな…と思った。



皆既まであと10分を切ってしまった。今回は月と太陽の視直径の差がほとんどないために、細い太陽になりつつあった。今回はタイムキーパーがいなく、皆既直前でバタバタすると失敗のもとになるため、露出の設定とカメラの向きを確認したうえで、魚眼レンズでの連写を開始した。その数分後には、私の後方の三脚にセットした自画像用のコンパクトデジカメでの録画を開始した。そうこうしているうちにも太陽はますます細くなっていった。



皆既1分程度前、ついにSKY90のフィルターを外して連写を開始した。そのころ、Tさんから、背後の空の色が黒くなっていると教えてもらった。確かに、今までに見たことがない黒っぽい空の色であった。太陽の輝いている部分は小さくなって、ついに待ちに待った皆既日食が始まった。

約6年ぶりに見た黒い太陽周辺に広がるコロナはダリアの花のように全周に渡って広がっており、極大期の特徴を示していた。プロミネンスも肉眼で存在がわかるものもあった。太陽の左上には、10日ほど前の12日に合を迎えた木星が見えていた。金星はどこ？と思ったが、広視野で撮影をしていることと、コロナの観望に集中したいため、後で考えることにした。55秒というのは、昨晚見たシミュレーションでは長く感じるが、本物はやはり短い。あっという



間に、光が漏れ始めた。去っていく月の影はよくわからなかった。また周囲が砂地であったためか、シャドーバンドは分からなかった。見事な皆既日食に、ほうぼうで拍手が沸き上がった。興奮冷めやらぬ中、魚眼レンズの連写を停止させ、自画像の撮影も停止した。

（実は、このころになってとんでもない忘れ物に気が付きました。EOSRa の露出設定を、事前に考えていた皆既日食設定に変更せずに撮影していました…。）

日食が終わった後は、昨日宿泊したカーナボンを通り過ぎて、シャーク湾沿いのモンキーマイヤーまでの移動（約 700km）が控えている。今回、オーストラリア国内でも皆既日食が見られるのは、エクスマウス周辺のみで、幹線が 1 本しかないため、95 年のタイや 17 年のアメリカで経験した日食渋滞に遭遇する可能性があった。このため、SKY90 以外の機材は少しずつ撤収することにした。

13 時過ぎ、太陽は何事も無かったような姿を取り戻した。残った機材を急いで慌てずに忘れ物が無いように撤収した。ふと周囲を見渡すと、あれほどいた現地の方の車はほとんどなくなっており、まさに兵どもの夢の跡の状態だった。

記念写真を撮って、海岸を出発したのは 13 時 50 分頃であった。幹線に出たが、心配していた渋滞は全く無かった。17 時 30 分頃、カーナボンの街並みに入る手前のガソリンスタンドで給油しつつ、併設されたお店で夕食の調達を行った。入口には、今回の日食に関するフリーペーパーが置いてあったので、ありがたく頂いたのは言うまでも無かった。18 時、カーナボンの街並みを過ぎたあたりで日没を迎えた。そのころ先ほど夕食として調達したサンドイッチを食べた。



モンキーマイヤー（シャークベイ）方面とジェラルトン方面の分岐近くにあるガソリンスタンド（Ampol Overlander Roadhouse）で休憩を取って（20 時ごろ）、一路宿泊先のモンキーマイヤーに向かった。公園との境界に設置された柵や小さな街並み（Denham（デナム））などを抜けて宿泊先である RAC Monkey Mia Dolphin Resort（モンキー マイア ドルフィン リゾート）に到着したのは、22 時 30 分頃であった。

（実はホテルに向かう途中、ジョンさんが道（Shark Bay Road）をそれて小道（Whale bone point）に入ってしまった。？と思っていると、バスを止めて、星を眺められる時間を頂きました。外は満点の星空が広がっており、大マゼラン銀河が正に雲のようにぽっかり浮かんで見えました。一晩、ここで過ごしても良いと思いました。）

駐車スペースの確保や部屋の位置の把握に手こずってしまい、部屋（3 人部屋でメンバーはカーナボンと同じでした）に入ることができたのは、23 時少し前だった。部屋はこれまたモンキーマイヤーの宿同様、非常に狭かった。そしてバス・トイレは隣の 3 人部屋と共用だったために、余計に不便に感じた。しかもエレベーター無しで 2F だったために、スーツケースを運び入れるのが大変だった。

これまでだったら、このままシャワーを浴びて寝てしまうが、南半球にきているのに満足に南天の星空を撮影できていない。翌日はジェラルトンへ移動して数日前と同じホテルへ宿泊だが、ここよりもずっと都会のため星景写真以外は無理である。パースはもっと大都会なので、どのみ

ち無理だというのは事前にわかっていた。チャンスは今夜しかないと考え、部屋に荷物を置いてからはホテル周辺を散策した。到着直前にジョンさんに教えてもらった、翌朝イルカ（「なごり雪」ではありません！）の餌付けを行う海岸方面に行ってみた。照明は無いが、砂浜で足がズブズブ潜ってしまうためダメ。結局 T さんが見つけた Beach Front Villas の北側が、多少照明があるものの、地盤がしっかりしているため、ここで撮影することにした。

部屋に戻って赤道儀を組み立てなおして、カメラにレンズを装着、極軸はなんちゃっての状態なので、ISO 感度を可能な限り上げて、露光は数秒に抑えることにした。なんだかんだと言って、撮影が軌道に乗り始めたのは日付が変わってからであった。撮影終了は体力か、バッテリーがばててしまうかまでのどちらかと思った。もちろん、綱渡りの使用をしていたコンパクトタイプのデジカメ用の充電を部屋に到着次第、始めたのは言うまでの無かった。

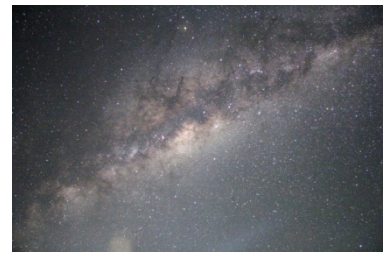
この時期、マゼラン銀河は地平線低くなってしまうが、サザンクロスあたりを撮影するのは丁度良い。アングルやレンズを変えて撮影して、最後にエッジオンの撮影を行うことにした。星雲星団ではないが、ニセ十字も良く見える。サザンクロスとのショットも忘れずに撮影した。ふと海側を見ると、北斗七星の柄の部分が見えていた。星景写真としては、面白いと考えて固定の連写で撮影した。

2 時過ぎ、浜辺につながる栈橋でタイムラプス撮影をしていた T さんが引き上げていった。ここは今いる所より照明が格段に少ないので、エッジオンはここに赤道儀を移動させて撮影し、今夜の撮影を締めようと思った。それでも照明が入ってしまうなど完璧ではなかったが、狙っていたショットは撮影した。3 時前に撤収して、シャワーを浴びて寝床に着いた。部屋ではすでに同室の K さん、Y さんがすでに就寝されていた。

○シェル&フライズ（ハエ）ビーチ

21 日（金）オーストラリア 5 日目である。朝食は 7 時～9 時であるが、6 時過ぎに起きてしまった。朝食まで時間があるため、同室の K さんと Y さんたちと一緒に敷地内を散策することにした。昨日は到着が夜中であったため、夜中撮影していた場所も含めて、周囲の状況を含めて全貌をやっと把握することができた。敷地内にはエミューが数匹いて、人間がよほど近づかない限り、逃げ出すことは無かった。日本での鳩のような感じであった。

予約客であることを示す紙製のバンドをつけて、朝食バイキングを取ったのち、ジョンさんに教えていただいたイルカの餌付けを見物した。その餌付けが終わった後の 8 時過ぎ、ホテルの売店を見に



行った。オーストラリア旅行経験が豊富な Y さんから、幹線から外れているから、ここには新聞は無い可能性は高いと言われたが、やはり新聞は置いていなかった。やはりここは田舎なんだ…と改めて思った。

（日食翌日の新聞を入手できなかったのは、日食翌日の未明に出国してしまった 95 年のタイ皆既日食以来でした。）

予定通り 9 時 30 分にホテルを出発して、ジェラルトンに向けて出発した。出発して一時間程度走って、シェルビーチに立ち寄った。海岸線がすべて小さな白い貝殻で埋め尽くされて見た目は美しいが、バスを降りてビーチに向かって歩き始めるとハエが纏わりついてきた。両手でいくらはらっても纏わりついてくる始末である。はたから見れば、ずっと阿波踊りをしている状態である。

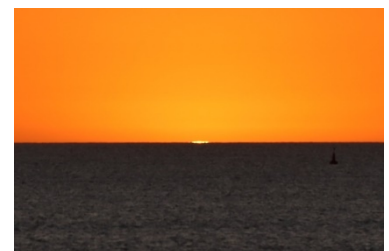
（ジョンさんによると、ハエはもともとオーストラリアにはいなかった。人間が持ち込んだ牛の〇〇に紛れ込んでいたものが繁殖したとのことでした。）

ハエだらけのシェルビーチを 11 時に出発して、昼食のために、Hamelin Pool Caravan Park & Café へ向かった。本来はここでストロマトライトを見学する予定であったが、事前に栈橋が破壊されているので見学は無理であった。栈橋がないと、海岸線からは遠くにストロマトライトがやっと見られる程度ということを経験した。11 時 40 分頃到着して、Café に入った。事前にジョンさんが昼食のサンドイッチを注文されており、お金を払えば受け取れるシステムであった。飲み物は各自で購入ということなので、サンドイッチと一緒に支払っていた方がほとんどであった。その後は奥の部屋に移動して、飲み物を飲みながらサンドイッチを食べた。部屋の壁をよく見ると、貝殻でできているのは、さすがだと思った。

12 時 40 分、ハメルンプールを出発して、一路ジェラルトンに向けて移動を開始した。15 時 20 分、ジェラルトンの北部にある Northampton（ノーサンプトン）のスーパーに立ち寄って、この日の夕食と翌朝の朝食を調達することにした。16 時 40 分頃、無事に日没前にジェラルトンのホテルに到着した。

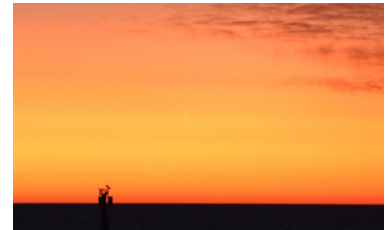
ここ数日の宿と異なり、2 人部屋でスーツケースを広げても余裕があるのは助かった。もう赤道儀を稼働させることは無いために、モンキーマイヤーの宿では不十分だった荷造りのやり直しや不要なものを処分した。この日は、日没と日食翌日の月、逆さまに沈むオリオン座を撮影するために、望遠レンズと広角～標準レンズを用意した。日没の撮影が最初だったために、部屋の中で EOS90D に望遠レンズを装着した。

17 時 30 分頃部屋を出発して、海辺に向かった。ツアーの仲間がいた砂浜まで一旦行ったが、三脚がズブズブ潜ってしまうために、道路沿いの広場に引き返して T さんが三脚をセットしている近く



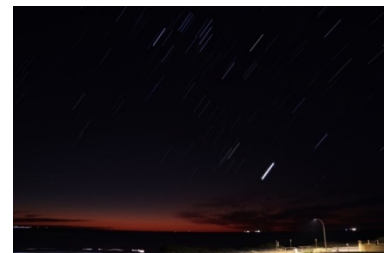
に三脚をセットした。太陽高度が低くなった 17 時 50 分過ぎから撮影を開始した。露出時間は分からなかったのも、日没はオートで撮影することにした。期待していた通り、複雑に変形しながら沈んでいき、最後はかすかではあるがグリーンフラッシュを見ることができた。

次は日食翌日の月である。月没は 18 時 30 分頃のため、リミットは約 30 分間である。金星も見え始めたので、月は太陽が沈んだところと金星を結んだ線上付近にあるが、北半球と異なり黄道（つまり白道）もかなり傾いている。しかも月があると思われるところには雲が広がっており、本当に探し出せるのか不安もあった。そして不安は的中して、細い月を見ることができるタイムリミットが過ぎてしまった…。



（後日、写真をチェックすると夕焼けに埋もれるように細い月が写っていました。）

大半の人はここでホテルに引き上げたり、夕食のためにホテルに隣接したレストランへ行ってしまった。残ったのは、逆さまに沈むオリオンを狙っていた T さんと私だけになってしまった。近くのレストランからは、耳を澄ませると日食仲間の W さんの話し声が聞こえていた。20 時ごろお目当てのものは撮影が終了して、T さんに声をかけて一足先に引き上げた。道中レストランを見ると、添乗員の M さんやツアーの仲間がおしゃべりしているのが見えた。



すっかり遅くなってしまったが、21 時 30 分頃カップラーメンとパンの夕食を取った。その後シャワーを浴びて疲れを取ることにした。同室の Y さんが戻ってきたのは、それからしばらく経ってからであった。

○ハンバーガーとワイン

この日は 8 時に出発であったため、7 時前に起きて、昨晚と同じメニューの朝食を取った。本日はジェラルトンからパース市街地北東側にあるスワン川沿いのワイナリー経由でパースの中心部に戻る日である。これまでよりは移動距離は短い、それでも約 380 km である。エクスマウス周辺とは異なり、街並みを抜けると牧草地や耕作地（小麦）、所々に風車が道路沿いに見られるようになってきた。また、焼き畑による煙が所々で見られるようになった。



（ジョンさんによると、日本で使用される小麦の 9 割はパースの港から出港されたものということです。つまり、普段我々が食べているパンに使用されている小麦は、パース産である可能性が高いということです。）



道路沿いには、枝の先に束子が付いたような独特の樹木もあった。もちろん、本物の束子ではなく、その樹木「バンクシア」の花である。形が独特であったため、道中撮影何度も撮影しようと思ったが、時速 100km 程の高速で走るバスの中では撮影は非常に困難であった。



そこで道中、車を止められそうな場所をジョンさんが探して駐車。ジョンさんの説明を聞きながら、束子じゃなくてバンクシアの花を含めて撮影を行った。

(バンクシアの花、白い部分とオレンジ色の部分があるが、ジョンさんによると白い部分がこれから開いていく花芽ということでした。白いものは枯れたものと感じる日本の樹木とは全く逆でした。)

その後は、再度移動を開始した。線路（貨物用）の手前で一時停止することなく直進するなど少々戸惑ったこともあったが、13 時ごろ目的地のワイナリー（Mandoon Estate）に到着した。土曜日なので、家族連れも多く、大いに賑わっていた。ここでは、和牛のハンバーグを挟んだ美味しいハンバーガーを、各自別購入したビールやワインを飲みながら頂いた。



(ジョンさんによると、オーストラリアでは飲酒運転に関しては、日本より寛大であるということでした。ただしスピード違反は厳しく、実際に藪に隠れているパトカーを道中何台も見かけました。)

その後はチョコレートショップ（Whistler's Chocolate Company & Cafe）や先の Mandoon Estate とは別の利き酒ができるワインセラー（Jarrah Ridge Wines）に立ち寄って、パースの街中にあるホテル（Duxton Hotel Perth（ダクストン ホテル パース））に 16 時 30 分頃到着した。ツアー参加者のうち、アストロアーツの K さんと F さんは星ナビの編集作業のため、明日の早朝出発ということで、ここでお別れすることになった。またパースの空港で合流した K さんも、明日の昼過ぎの便で出発するとのことだったので、ここでお別れすることになった。



夕食は各自ということで、同室の Y さん、そして K さんと一緒に近くのインドカレーで取ることにした。バターチキンカレーをナンで食べるもので美味しかったが、カードで 3 人別々に会計と言った時の店員の顔が印象的だった。

(メニューを見ても分からなかったもので、Y さん、K さんに頼りきりでした。)

この晩はパースという名古屋市並の大都市ということで、星空撮影は全くすることなく、体を休めることにした。

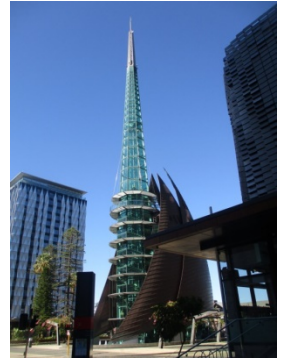
○パースとジョンさん

パース最終日の 23 日（日）は、14 時までフリータイムということで、同室の Y さんは早々と出かけてしまったが、私はのんびりと過ごした。しかし、朝食を調達するために 8 時過ぎにホテルを出発した。コンビニで調達した朝食（カップラーメンとリンゴ）を取ったのち、しばらく部屋でのんびりしていたが、せっかくなのでホテル周囲を散策してみることにした。

ホテルを 10 時前に出発して、スワン川方面へ移動を開始した。それから川沿いをフェリーターミナル（Port of Perth）方面へ移動した。休日だけあって、散策している人や自転車で移動してい



る人が多かった。もちろん、ベンチでゆっくりしている人もいた。ベル塔（The Bell Tower）を眺めながら移動するとコンビニがあった。サンドイッチがあるなど、朝行ったコンビニより明らかに品数が豊富であった。昼食まで時間がある（10時30分頃）ため多少悩んだが、ここでホテルに帰って出直すのも面倒なので、ここで昼食を購入することに決めた。朝がかなり貧相だったので、サンドイッチ以外にフルーツも購入するなど、結構豪華に？なった。



14時少し前に同室のYさんと部屋を出てロビーに行くと、ジョンさんがすでに到着していた。その後バスに乗り込んだが、3人抜けたことや、昨日までバス後方に積んであったキャンプ用具（テントやマット、シュラフ）がないことから、バスの中が非常に広く感じた。棚の上に置いてあったテントも無くなり、エクスマウスへの道中時々あったテントが突然通路に落下すること、もはやない。14時過ぎにホテルを出発したバスは、Kings Park and Botanic Garden へ向かった。パース初日は朝食を食べるためであったが、今回は純粋な植物園の見学である。ここではジョンさんの案内で、ユーカリの花、カンガルーポー（赤いつぼみがカンガルーの手のような形に見えるため名付けられた）、ペパーミントの大木、樹液が豊富な Marri、昨日近接したものとは別の種類のバンクシア（葉は意外に硬い）や綿に包まれたような新芽、地下水があるからこそ生えているグラスツリー、北部のキンブリーから移植したバオバブの木、故エリザベス女王が1954年に植樹されたユーカリの木等いろいろな植物を見学した。時折、見晴らしの良い場所もあり、スワン川を挟んでパースの市街地が良く見えた。



植物園を15時30分過ぎに出発した後は、City Beach へ向かった。パース市のビーチだから、City Beach という名前ではなく、もともとこの名称ということである。パース付近は砂浜が数十キロにわたって続いているが、適宜区切られており、それぞれ名称がついているとのことだった。ここでは海岸よりも、なかなかラリーが続かない現地の方のビーチバレーを眺めていた。20分程度滞在したのち、高級住宅街やスワン川河口のヨットハーバーを抜けて、第一次及び第二次大戦で亡くなった方を祈念する Fremantle War Memorial（フリマントル・ウォー・メモリアル）へ移動した。ここは高台にあり、Fremantle の港や街並みを一望することができた。

次に向かった Fremantle Prison（フリーマントル刑務所）は、そこから車で数分の場所にあり、16時55分頃に到着した。もちろん、今は使用されていないが1850年から1991年まで、実際に刑務所として使われた建物であり、トイレ休憩を兼ねて見学した。そこからはイタリア人が入植したときに作ったイタリア風の街並みを抜けて、石造りの建物で、音で時を知らせた砲台がある The Round House（ラウンドハウス）へ登った。その手前は貨物電車用の線路があり、帰り道偶然貨物電車の通過に



遭遇した。機関車は先頭の一台なのに、引いているコンテナ（日本でいえば、秩父セメント）の量は半端でなく多く、Mさんは数えていたらしいが、あまりにも多すぎて途中でやめてしまったそうである。ここを出発したのは 17 時 55 分頃、日はだいぶ陰ってきた。

夕食会場の Little Creatures Brewery, Fremantle に着いたのは、それから数分後であった。次第に月と金星が見え始めていた。丁度最接近の日だったので、私を含めて夢中で撮影した。最後はどうしてもぶれてしまうために、感度を Max に設定にしてオートで撮影した。夕食は、各自注文・各自支払いだったので、それぞれのテーブルで注文していった。

（私は同じテーブルで英語が堪能な Mさんに頼りきりだった。）

20 時 30 分頃夕食会場を後にして、いよいよパース国際空港へ移動を開始した。途中 20 分程度走った川沿いの住宅街で一旦バスを降りて、パースの夜景を楽しんだ。その上には、サザンクロスやニセ十字、カノープスが見えていたので、名残惜しんで眺めてはダメもとで撮影した。再度移動を開始して、空港に到着したのは、21 時 30 分過ぎであった。

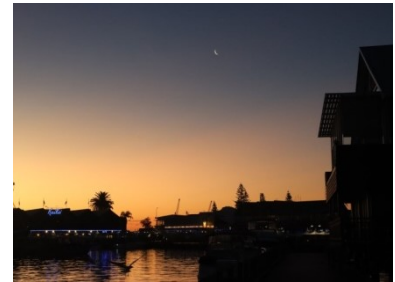
約一週間前、形が北半球仕様だと思ったオリオン座のオブジェある到着ロビーを通り過ぎて、自動チェックイン機がある場所まで移動した。ジョンさんはここまでということで、名残惜しんで別れた。

ジョンさん、いろいろありがとうございました。そして、本当にお疲れさまでした！

＊ジョンさんによると、我々のツアーで約 3,500km 走破したとのこと。およその目安ですが、東京駅を起点とした場合、あくまでも直線距離でおよその目安ですが、300 kmは関ヶ原や仙台、600 kmは福山や青森。900km は旭川や宮崎。1,200km は奄美大島までの距離とほぼ同じです。3,500km は…南シナ海にある海南島やフィリピンのミンダナオ島までの距離とほぼ同じです。

ジョンさんが去った後、各自で自動チェックインを行ったが、予約番号云々と我々が知らないことを聞いてきた。ツアーの仲間が、別の機械ではそのようなことは聞かれずにできたということで、そちらの機械でチェックインを行った。

次の関門、いや一番の関門である機内預け荷物の手続きを行った。しかし、事前に空港にある計測機では 28kg と規定を 3kg もオーバーしていた。案の定、自動機内預け機は拒否されてしまった。添乗員の Mさんと相談して、有人のカウンターに行ってみたが、そこにいた男性の係官は切迫感がなく、どうみても真面目に仕事をやっている感は無かった。そこで、先ほど機内預けの荷物のバンドを巻いてくれた女性の係官のところへ行った。今度はきちんと対応してくれて、機内預けの係官のところへ行ったが、なぜか OK ということで、超過料金を支払うことなく、手続きを済ませてくれた。丁寧にお礼を言って、



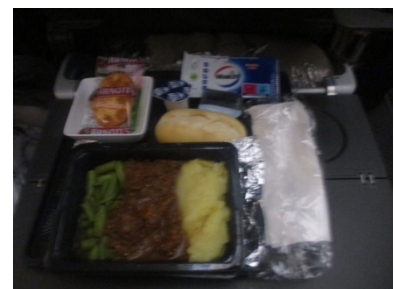
出国手続き（入国時と同様、わざわざスタンプを押して頂きました）を行うために、カウンターがある上の階に急いで移動した。

出国手続きも無事に終了して、免税品店のところまで移動した。オーストラリアでのお土産を購入できる最後のチャンスである。実は前日のスワンバレーのチョコレートショップで購入しようと思ったが、小分けになっていないためにパスしていた。レジが 1 人しかいなく、爆買いしていた中国人の団体のために、購入が完了したのは 23 時頃だった。

エコノミークラスの搭乗手続きが開始されたのは、日付が変わった 24 日（月）の 0 時 40 分で、定刻より 8 分ほど遅れた 1 時 28 分頃離陸した。

○焼きそば

離陸した飛行機は車と比べ物もなく速い。離陸してから約 55 分でハメルンプールがあるシャーク湾、あれほど苦労したエクスマウス付近（の西の海上）を、1 時間半で通過してしまった。機内食を取ったのちは、コンパクトタイプのデジカメ用のバッテリーを充電しつつ、飛行経路を示すディスプレイを OFF にした。シンガポールに到着したのは、まだ暗い 6 時 10 分頃であった。



（実は、隣の隣の座席に座っていたお子様が床に落としたものを拾うために CA さんが入ってきましたが、その際、私の充電器やコンセントのアダプターなど蹴られて、行方不明になりました。このため、CA さんが去った後、ジェスチャーで隣の方に充電用のものが無くなったことを説明、しばらく搜索をする羽目になりました。この間、CA さんが来ることはありませんでした。）

往路とは異なり、復路への乗り換え時間は 3 時間程度で、国際線としては普通であると思った。成田へ向かう便の搭乗口を確認して、一旦解散することにした。ちなみに我々の乗る便、成田経由のロサンゼルス行きということで、成田が最終目的地ではないと考えると複雑な心境になった。シンガポールからロサンゼルス、地球半周分の移動ではないかと思った。搭乗口付近で待っている間、添乗員の M さんが回ってこられ、成田到着後は流れ解散ということ話を話されていた。

Time	To	Flight	Terminal	Gate	Remarks
0905	Bengaluru	SQ 508	3	A9	
0910	Kuala Lumpur	AK 702	4	G9	Take bus to
0915	Da Nang	SQ 172	2	F36	
0915	Manila	NZ 3436	2	F38	
0915	Bali - Denpasar	SQ 938	2	F42	
0915	Jakarta	SQ 956	2	F60	New Gate
0920	Kuala Lumpur	SQ 108	2	F52	
0925	via 東京成田	SQ 12	3	B9	
0925	San Francisco	SQ 32	3	B6	
0925	Manado	TR 216	1	D41	
0930	Perth	SQ 223	1	C24	
0930	Bangkok-BKK	SQ 708	2	F31	
0930	Shanghai	VA 5758	3	A14	

8 時 30 分頃に搭乗口に移動する前に手荷物の X 線検査が行われ、日本到着後に税関に手渡す携帯品・別送品申請書が渡された。不安定な機内で書いてもミミズがのたくったような字になってしまうため、搭乗を待っているうちに書くことにした。9 時になって機内案内が行われ、離陸用の滑走路へ移動したが、離陸しない。英語のアナウンス後、日本語のアナウンスがあり、滑走路に障害物があるために、その撤去のために 5 分ほど待つてほしいとのことだった。犬じゃないんだぞ！と思ったが、焦っても無意味である。結局予定より 40 分遅れた 10 時 10 分頃離陸した。

（飛行機はパース - シンガポール間と異なり、座席間にコンセントが無く、機体は多少古いと思いました。）

復路の航路は、往路と異なりフィリピン北部海上を通過することになっていた。このため、火山の写真は撮影できなかった。機内食が出たのは、乱気流が無かったためか、離陸から 1 時間経

った頃であった。遠くから聞こえるメニューの選択肢はチキンかヤキソバであった。国際線でヤキソバ？と思っていると、本当にヤキソバであったので、迷わずヤキソバを選択した。それは正真正銘の焼きそばであった。

（帰国した翌日は休暇にしていたが、この日の昼食は焼きそばにしようと思いました。）

14時30分頃、東京（成田）到着まで約2時間。飛行機は沖縄本島付近を通過しようとしていた。仕事で沖縄は何度か訪問しているが、本島上空を通過するのは初めてであった。カメラを用意してCAさんたちがいる機体後方へ移動した。しばらくすると、見たことがある空港（那覇空港）や街並み（那覇市や浦添市、うるま市）などが見えたので、夢中になって撮影した。その後は、島しょ部から離れての飛行だったので、自分の座席に戻った。

成田空港到着まで30分を切り、着陸態勢に入った。飛行機は房総半島を中心に反時計回りに回り始めた。どうやら北側から空港へ侵入するようだった。空港の気象情報も入って、天候は曇りで気温は13℃ということで、かなり寒い。空港内は問題ないが、帰り道の道中で上着をシートケースから取り出す必要があると思った。飛行機はさらに高度を下げて16時30分頃、成田空港へ着陸した。出発は遅れてしまったが、到着は追い風のために、定刻通りになっていた。

着陸してから15分程度経った17時45分過ぎ（以下、日本時間とする）、ようやく飛行機から降りることができた。所々に検温のサーモグラフィが置いてあり、係官が乗客の体温をチェックしていた。検疫のゲートを通じたのち、入国審査を行った。事前に準備していたワクチン接種照明書をパスポートに挟んでおいたが、特段チェックはされなかった。その後は、機内預け荷物を受け取りであったが、シンガポール空港やパース空港に比べ、成田空港のスペースは正直狭い。ベルトコンベアに乗っている荷物を受取る人物がいらない限り、荷物は増えていき、補充が停止されてしまうこともたびたび起きた。それでも18時10分になって、やっと自分のスーツケースが出てきて受け取った。

同じツアーの仲間に挨拶をして、税関に向かった。ここでは、携帯品・別送品申請書を渡して、行った場所や目的を確認された。その数分後、面倒な手続きはすべて終わって、名実ともに日本へ帰ってきた。

感慨に浸る間もなく JR 乗り場へ急いだ。12分発の成田エクスプレスには間に合わないため、その次の18時48分発、新宿着20時18分の新宿行きで移動することにした。時間ができたので、トイレに行って、この日は機内食の焼きそば以外何も食べていないので、改札口近くのコンビニで軽食（パン）と飲み物を調達した。さらに残っていたオーストラリアドルを日本円に換金した。

電車は到着電車が遅れた都合で、定刻より数分遅れて出発した。次の駅の成田空港第二ターミナル駅を通過してから、スーツケースを開けて、上着を取り出した。それからは新宿駅で重いス



ーツケースをゴロゴロ転がして、20 時 33 分に何とか目的の電車に乗り換えることができた。自宅に到着したのは、それから約 1 時間後の 21 時 30 分頃であった。

自宅では妻がデリバリーの生寿司と豚汁を作って待っていて、久しぶりの日本食を味わった。

○エピローグ

こうして無事に終了したオーストラリア皆既日食。しかし想像以上の乾燥で、私を含め旅の最後の頃には、のどを痛めた人が多かった。今度はハエ対策とのど対策（のど飴やマスク）を万全にしてオーストラリアの乾燥地帯に行ってみたいと思う。

また南天の星空撮影についても課題が残った。今回宿泊したホテル、パース以外は Google のストリートビューで星空撮影ができるかどうか事前にチェックを行った。しかしストリートビューで街灯がないと思った場所でも、意外に街灯が多くてガッカリしたのも事実である。当たり前の話であるが、ストリートビューは昼間の映像で、夜のもの（暗さを証明するものはない）ではないとことを改めて思った。本気で南天を撮影するには、人里離れたところに移動するしかないと思った。

キャンプ場での星空撮影に一番期待したが、サイト内に自動車の乗り入れができるオートキャンプ場では、綺麗な星空は望めないことも実感した。キャンプ場自体も設備が整ったところは、調理スペースやトイレ、冷蔵庫など完備されているが、その分照明が多い。逆に星空が綺麗に見られるようなキャンプ場は、それらの設備が貧相であることを覚悟しなければならない究極の二択である。

今回の皆既日食では、タイムキーパーがいないことも初めてであった。これは正直、不便であった。

いろいろ課題を残した今回のオーストラリア皆既日食であったが、旅そのものは楽しませて頂いた。このような旅を経験させて頂いた添乗員の M さん、ジョンさん、そしてツアーのメンバーへ改めて感謝の意を申し上げます。

以上

